

能登半島地震復興支援レポート

木育でつながる子どもと森と地域の輪

木育とは？

木に触れ、人と森、自然とのつながりを学ぶことを通じて、子どもたちの五感や豊かな心を育むことを目的とした教育活動のこと。森の木を資源として有効活用することにもつながっている



能登ヒバのつみ木

珠洲市つばき保育園

長年の活動でつながる縁

山梨県支部は、オイスカの理念の実現のため、富士山の森づくりや木育の取り組みを



土砂災害の爪痕がいまなお残る(25年3月現在)

はじめ、さまざまな企業・団体と協働しながら、自然と人の持続可能な循環型社会の構築に向けた活動を進めてきました。その中で「縁のあった団体から、震災直後、「オイスカで何か支援できないか」と支部にお問い合わせをいただきました。2011年の東日本大震災時に、子どもたちへの支援として「森のつみ木広場」を実施した経験があるものの、緊急支援を主とする団体ではないオイスカにすぐに行うことは少なく、かえって現地の復興の妨げになってはいけなと自粛していました。

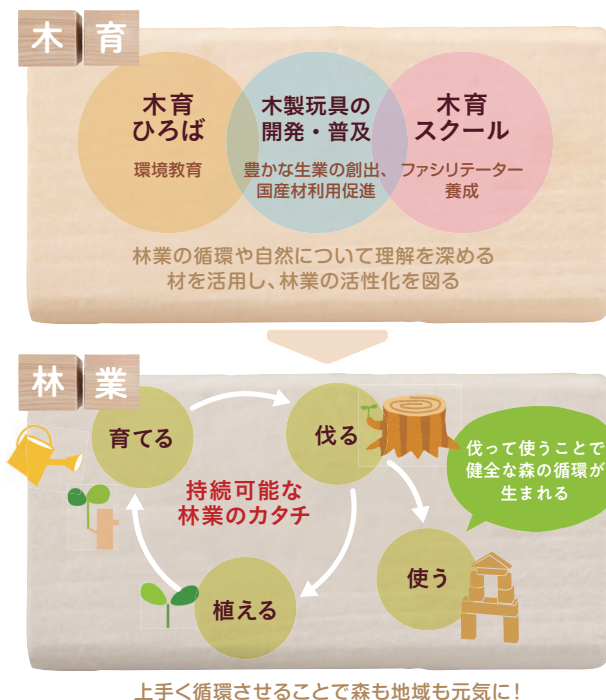
「被災地支援のために何ができるか、一緒に検討できないか」。思いが形となって動きはじめたのは、木育事業で「縁のあった団体からの、こ

のお声がけからでした。被災地ではインフラが復旧せず、家屋も倒壊したままとなっている状態です。そうした地域で暮らす子どもたちに、木育の経験を活かして心のケアの面から支援する構想が生まれました。

「求められていたもの」とは

最初の活動として、(財)国土緑化推進機構の関係者からつないでいただいた縁を頼りに、24年9月13・16日に石川県珠洲市と輪島市を訪問。現地の確認とニーズ調査を行いました。これまでにつながりのない地域で正確なニーズを掴めるのか不安でしたが、珠洲市に入った夜、夕食時に偶然市役所の方と出会いました。これも「何かできないか」という思いが一つのご縁のように感じます。そこで、「被災地では緊急性の高い支援が優先され、インフラの整備も遅れており、子どもたちが安全に遊べる場所がない」「大人に子どもたちと向き合う余裕もその環境もない」といった現場の声を聞くことができました。

2024年1月1日に発生した、石川県能登地方を震源とする最大震度7の大地震。オイスカ山梨県支部は、同9月に木育を通じた支援を開始し、心と地域産業の復興を目指して活動を実施、継続しています。「何かできないか」という思いが、どのように地域とつながり、木育という形で実現していったのか。これまでの活動を振り返ります。(山梨県支部会長代行 田中美津江)



また公営の子どもセンターを訪問し、私たちの構想を伝えると、「東日本大震災の後、そのような支援があったことを聞いていた。保育園の職員も、日々子どもたちのケアに試行錯誤しているのでもとてもありがたい」というコメントをいただきました。一方で、「冬が来たら外で遊べなくな。子どもたちが落ち込まないか心配だ」という切実な声も聞かれました。

ニーズ調査後、「木育で子どもたちの遊び場を提供し、心の復興を目指す」という方針を固め、すぐに支援に向けた準備を開始。助成金獲得などに動く中で、11月にはオルビス株式会社のご協力を得ることができました。同社とは、森づくり事業で長年連携しているほか、東日本大震災時の活動でも長期にわたりご支援いただいております。12月に、珠洲市のつぎ保育園でのつみ木広場の実施や、木製玩具の寄贈ができたことは、この応援があつてこそでした。また他地域から二次避難している親子を迎えて金沢市でも広場を開催し、雪が降る本格的な冬の前に、木製玩具の温もりを届けることができました。

「本当の復興」を目指して

山梨県支部は、人と木を育み、循環を生み出すことが持続可能な社会の構築につながるという信念のもと、子どもが木に触れ、遊びを通じて森や自然について理解を深める「木育ひろば」、広場を開催する「木育スクール」、そして木材を積極活用することで林業の再興につながる「木製玩具の開発・普及」の3本柱で木育事業を進めています。

冬の間に現地の関係者とやり取りをする中で、珠洲市の保育園や子どもセンターから、自分たちで広場を実施できるよう「木育スクール」の開催希望がありました。また、能登の代表的な木材である能登ヒバを使ったつみ木製作を、地元で行う動きも出てきました。これらは中央共同募金会の「ボラサポ・令和6年能登半島地震第6回助成」を得て3月に実施でき、3本柱全ての活動が実現しました。当面支部でつみ木を作る際には、この能登ヒバを活用していきたいと考えています。林業と

いう地場産業が活性化し、森も人も元気になることが「本当の復興」に向けての大きな一歩となるはずです。

被災された皆さんから、「ゼ口からの生活になった」という声や「これからなんでもできる」という前向きな言葉など、さまざまな思いを聞きました。私たちの生活は物質主義となり、自然から離れてし

まったことでサイクルを失っているように感じていたが、被災地ではこれまでの生活がリセットされたことで、改めて自然とのつながりを意識しているように感じました。時に脅威となり、時に我々を守ってくれる自然と、礼節をもって付き合う大切さを、木育を通して引き続き伝えていきたいと思っています。

珠洲市子どもセンターからのコメントをいただきました

震災後、子どもたちに木の玩具を寄附いただいたことをきっかけに始まったオイスカとの交流。保育園で開催したつみ木広場では、全身を包み込むつみ木のシャワーに子どもたちから大きな歓声があがりました。最初は緊張していた子ども木育ファシリテーターとのやり取りで集中を深め、終了後は「もっとしたかった」「次はみんなで大い街を作りたい」といった声が聞かれました。その後保育施設で働く職員へ向けて木育スクールを開催し、つみ木から広がるさまざまな支援の形を学ぶことができました。木製玩具は触れているだけで心が落ち着くように感じます。復旧・復興を目指して日々邁進する被災地で、今後も保育の中で、心を癒してくれる木の大切さや自然への興味を持つきっかけになるよう、木育を遊びの中に取り入れていきたいと思っています。



上／多様な参加者が集まった木育スクール(金沢市)
下／保育士・子どもセンター職員対象の木育スクール(珠洲市)